

## 漢方薬エキス剤薬情説明文の改定

私が業務契約している大学病院近くにあるサンウッド薬局古沢店では、昨年末より漢方薬エキスの薬情の説明文について改定を検討していました。きっかけは昨年長野で開催された日本薬剤師会学術大会の特別講演での寺澤先生(前富山大学附属病院和漢診療学教授)からの指摘からでした(PASKARA NEWS 71号参照)。

その薬局で使用している三菱メルフィンの薬情では漢方の考え方を十分には伝えていないという観点で、現在では次のような形式での説明文としました。

### 対応する具体的な症状（和漢診療学上の概念文）

概念文を入れることで患者様への説明に薬剤師として奥行きを持たせることができる一方で、患者さんには分かりにくい概念文を入れることが反って医師との間で混乱を招くかもしれないという危惧があり、導入するには賛否両論もあると思います。しかし、和漢診療科をもつ大学病院の門前薬局としてはチャレンジ精神をもって対応してもよいのではないかという思いがあります。今のところ、この表現に対する患者様や診療科側からの反応は残念ながら良きにつけ悪きにつけ無いそうです。あればあったでその都度対応していくつもりですが、当面は現行のままで実施して様子を見ていきたいと思っています。

具体的な例として「大建中湯エキス」(現在、大震災の影響で工場の生産ラインがストップしてほとんど流通していない状況ですが)の薬情説明文は下記の通りで、その特徴について①～⑤で説明します。

**腹部の冷え、腹痛、腹部の張りなどを伴う諸症状の改善に用いられます(太陰病。腸型。虚証。脾に衰え、胃腸が寒に侵され、気血の巡りが不良。)**

- ①ゴシック太文字部分が対応する具体的な症状になります。漢方には異病同治(いびょう・どうち)と言って、西洋医学では異なる病気ですが同じ漢方薬が用いられる場合や同病異治(どうびょう・いち)と言って同じ病気に異なる漢方薬を用いて治療する場合があります。例えば、異病同治では葛根湯を風邪、肩こり、中耳炎、蕁麻疹に使用したり、同病異治では風邪に対して葛根湯、麻黄湯、桂枝湯、麻黄附子細辛湯を使用したりすることです。従って、対応症状には原則として具体的な病名を記載せずに代表的な症状のみ記載して、後は諸症状の改善という表現で応用範囲の広さを持たせています。
- ②症状の表現として、うつ状態、ヒステリー、興奮症状、神経症などの精神の変調を現わす表現は避け、気持ちを和らげる、不眠を改善するなどの人をあまり不安に感じさせない表現にしてあります。
- ③( )内が和漢治療学の概念になります。この部分は寺澤先生著「和漢診療学」に掲載されている表現を基にして構成しています。薬剤師が和漢薬エキスの説明をする際に症状の表現だけでは不十分なので、この( )内の部分を理解すればエキス剤の説明をより適切に行えるようにしています。ここ

でも「気鬱(気のうっ滞)」という「うつ病」を連想させる表現は「気滞」に統一し、五臓の一つである「心(しん)」を精神上的の「心(こころ)」と誤解されないような表現に代えてあります。

ゴシック部分は患者様にも分かりますが、( )内は患者様には恐らく理解できないと思われます。もし患者様がこの文面を見て、「こりゃなんじゃ？」と聞いてきたら患者様とのコミュニケーションを深める手段(患者情報を得る手段)ともなり得ると思うのです。そのために基本的な和漢治療の概念の理解は是非ともしておきたいものです(現在、その薬局では中医学の概念も模索しつつ隔週で漢方薬のミニ学習会をして方剤の理解を深めています)。

④「太陰病。腸型。虚証。脾に衰え、胃腸が寒に侵され、気血の巡りが不良」の意味

太陰病とは病気の進行状況を表現する「六病位」における陰証の第一ステージで、病気に対する体の反応が全体的に寒性、非活動性であることを現わしています。また病変部位が主に体の奥(裏)にあることも意味しています。具体的には次に**腸型**となっているので、**腸(裏)**に病変部位があると分かります。さらに**虚証**となっていますから、その裏(腸)における体の抵抗力や反応が非常に弱い状態になっていることを現わします。

体の抵抗力というのは、体の機能を維持している成分である**気、血、水**の力が強いかわりで決まりますから、大建中湯の証は腸の付近における**気血の力が弱い**という症状になります。

何故、気血の力が弱いかわりと、「脾が衰え、胃腸が寒に侵され」が原因になっています。**脾**というのは現代医学でいう胃腸に相当し、食物を消化し吸収する臓器で**食物**の中に含まれるエネルギー(**気**)を吸収します。**気**の一部は**血(栄養分を運ぶ赤色の液体)**に生まれ変わります。**寒**とは病気の原因となる寒冷刺激で、寒が胃腸(脾)を侵すとその働きが弱まり、結果的に**気と血が不足**し体内での**巡りが悪く**なってきます。

**気の力が弱い**と「元気がない、気力がない・・・」、**血の力が弱い**と「筋けいれん、しびれ、不眠・・・」などの症状を伴います。

⑤大建中湯の病態の「具体的な背景④」から「対応する症状」になっていますので、大建中湯の作用は「脾胃を温めて、寒を去り、けいれん性の疼痛(疝痛)を止める。また脾の働きを高めて、気を取り込み元気にさせる」という連想をしてもらうことになります。

さらに薬情からだけでは分かりませんが、参考までに下記も紹介しておきます。

①応用される**西洋医学病名**としては

慢性胃腸炎、尿管結石、胆石症、膀胱炎、過敏性腸症候群などになります。

②大建中湯を構成する**生薬の役割**は下記の通りです

**山椒・乾姜**→中(脾胃)を温め、寒を散らす→消化管の血行を良くし蠕動の過亢進を抑制し鎮痛する。

**膠飴**→山椒・乾姜の刺激を和らげ、滋潤栄養する(水分や栄養分を体に与える)。

**人参**→健脾益気→脾の作用を高めて気を益す。

③大建中湯の名称から

**中**とはお腹を意味し、胃腸を意味します。つまり建中とは**中(お腹)を建て**て直し症状を改善すると考えると理解しやすいと思います。接頭語の**大**はその効果が強いという意味を与えていると考えられます。

以上。

※当面はエキス剤のみですが、今後は生薬(刻み調剤用)の説明文についても和漢診療学上、中医学上の概念を取り入れた表現に代えていくべく検討中です。

※なお、作成にあたっての中医学上のアドバイスは、サンウッド薬局古沢前薬局長の谷澤氏にご協力を得ました。